

京都洛西山田浄住寺境内絵図の現地比定について The Location of the Medieval Jyōjūji Temple in Yamada, Western Kyōto City as seen through a Pictorial Map painted in 1333

松尾 剛次・阿子島 功
MATSUO, Kenji・AKOJIMA, Isao

キーワード：中世仏教史、絵地図、洛西山田、浄住寺

Key words : Buddhism in the Middle Ages, Pictorial map, Raku-sei-Yamada, Jyōjūji Temple

はじめに

京都市西京区山田にある葉室浄住寺は、弘長元(1261)年に葉室定嗣(1208-1272)が、叡尊を師として出家し、叡尊を招いて山荘を結界して西大寺末寺の律寺としたことに始まる。江戸時代に、鉄牛道機により復興されたために、現在は、黄檗宗である。浄住寺には、数多くの文化財が残っているが、とくに「正慶2(1333)年2月に浄住寺僧比丘守教によって作成された境内絵図」(以下、「境内絵図」と略す)は鎌倉時代末期の西京をビジュアルに理解できる貴重な史料である¹⁾。

2008年9月に浄住寺の旧境内地を調査し、「境内絵図の世界」の現地比定を試みた。本稿は、その調査報告書である。第一章は松尾、第二章を阿子島功が執筆した。

第一章 境内絵図の現地比定について

先述のごとく、「境内絵図」は、正慶2年2月に浄住寺僧比丘守教によって作成されたものである。その絵図に表現された境内地は、現代のどの地域に比定できるのだろうか。

境内絵図は、北を右に、南を左に描いてい

るが、通常の寺院建築と異なり堂舎は東を向いている点が特徴である。また、いずれの堂舎も、東北側の二面が表現されているので、東北の隅側から視線が当てられている。

また、南側に「春日」・「八幡」が祀られたゾーンがある。すなわち、南が「神の領域」、北側が「仏の領域」であった。

まず、境内地の南端については、正慶2年の「境内絵図」の南側(図の左端)に「谷田川」が見える。すなわち、谷田川が南端であったと推測される。そこで、昭和21年の米軍撮影の航空写真を参照しながら、都市計画図(縮尺3,000分の1、大正11年測量図)に線を引いた(図2)。

先述のように、南側には、「春日」・「八幡」が祀られたゾーンがある。現在は、境内地内に天照天神と春日・八幡の三神が合祀されている。その「春日」・「八幡」が祀られたゾーンがどこにあたるかは、東側がどこまでかによって異なってくるが、一応、現在の、西蓮寺と葉室御霊神社のあたりに比定しておく。

次に、北側は、食堂が急な階段によって建物(僧坊か)と繋がっている。それゆえ、急な

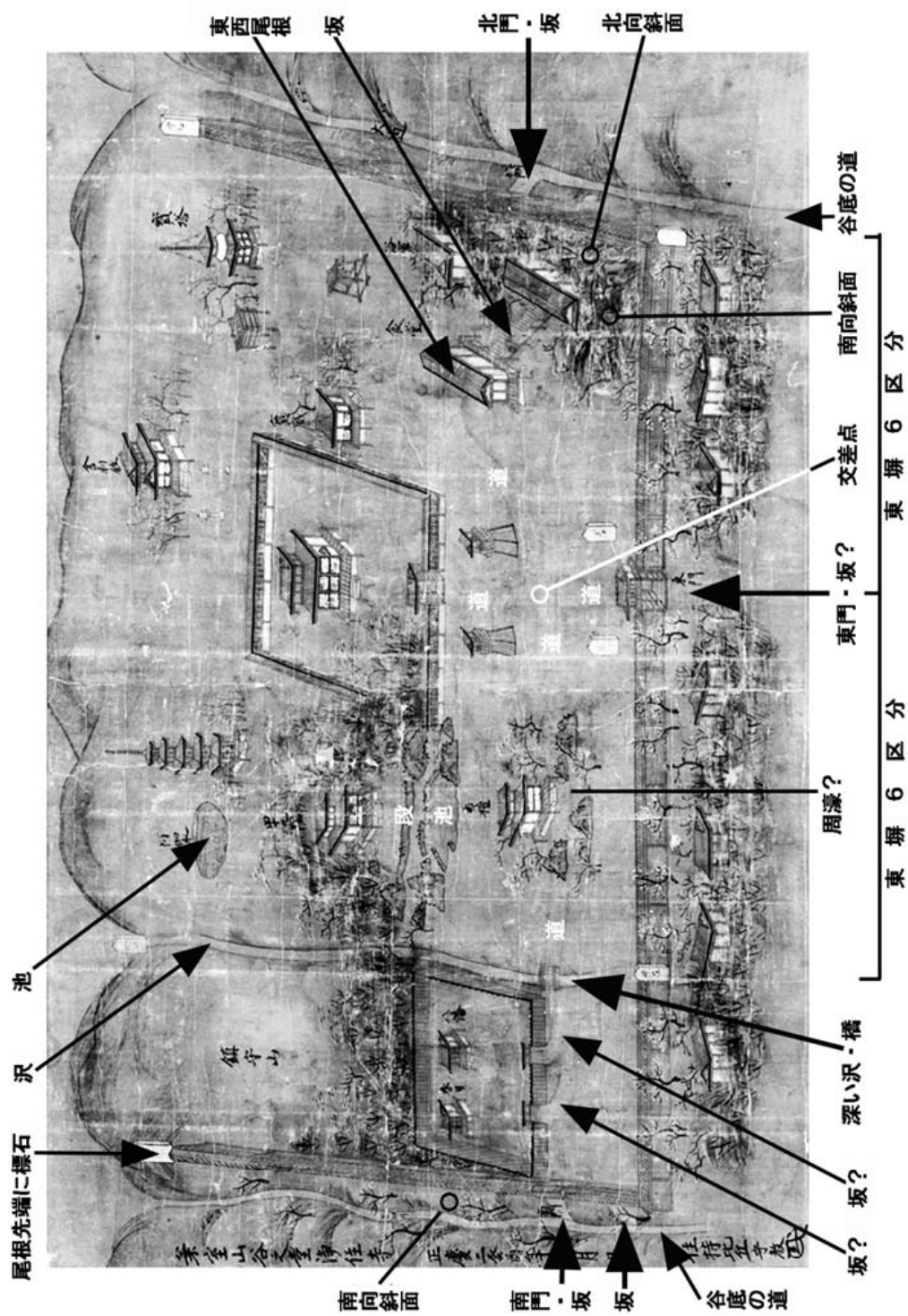


図1 京都山田浄住寺の境内地の絵図(正慶2年、1333) 地形の特徴などを注記

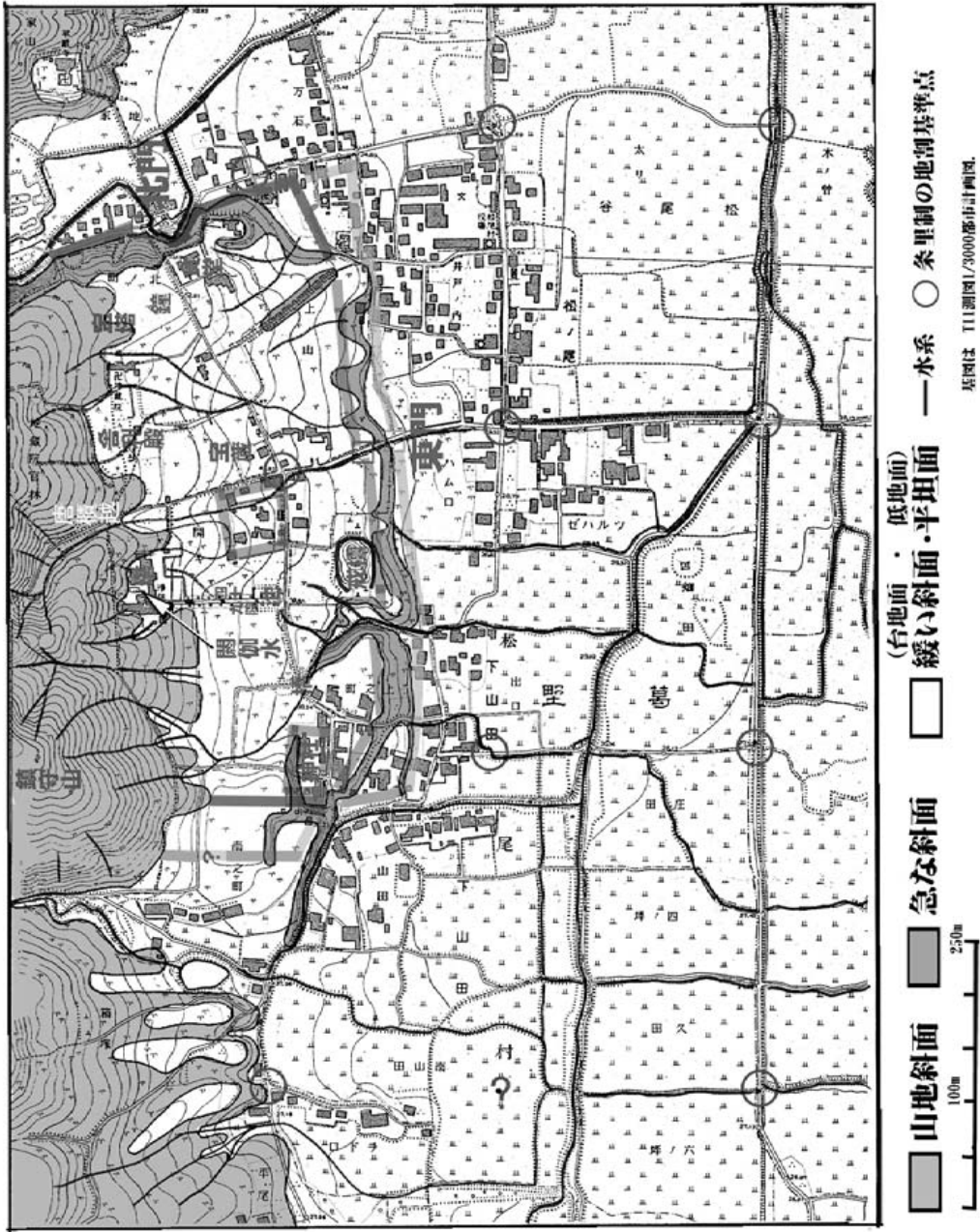


図2 中世浄住寺の境内地の範囲と建物・施設群の配置を現況へ比定した図
 (基図は大正11年(1922年)測図)

崖があったと考えられる。現地調査を行い、大正11年の都市計画図を検討してみると、地蔵院の北側、つまり西芳寺との境に存在する急峻な崖が目される。

すなわち、西芳寺前の道が、絵図の北側にある「大道」にあたると考えられる。とすれば、地蔵院の境内も浄住寺の境内であったことになる。食堂・宝塔などは、地蔵院の地にあったのであろう。

地蔵院は、細川頼之が、貞治6(1367)年10月4日付けで、周岐に寄附して成立したという。それゆえ、貞治6年以前には、浄住寺は北側の地を失っていたことになる。²⁾

ところで、丹波に抜ける道であった唐櫃越の道は、現在の浄住寺と地蔵院との間を分つ道であるが、一見すると「境内絵図」には見えない。ところが、丁寧に見ると、東門から宝蔵まで道が見え、おそらく、その道が唐櫃越の道に繋がっていたのであろうか。

西側は、「境内絵図」によれば山(葉室山とか衣笠山という)によって区切られており、葉室山が西の境であった。

問題は、東側の境界である。東側の境界がどこまでであるかははっきりしない。絵図には、土塀に囲まれ、標石によっても表示された境内地が表現され、東側には、土塀外に塔頭群が描かれている。

浄住寺は叡尊に帰依した葉室定嗣が弘長元年に自己の山荘を寺院としたものである。昭和21年の米軍撮影の航空写真を見ると、東側を南北に走る道があるが、それは、山田の条里制の道である。東側土塀の各区画の長さは条里に対応していたように見える。それゆえ、古代に葉室家が賜った山荘は、葉室山から、条里の線近くまであったのかもしれない。後

述の明治17年に制作が始まった官製地籍図(C)には、地字名に「葉室」という土地が、現在の浄住寺の寺地の東側にあり、ほぼ、「山田岐れ」の線までである。葉室家の領地は境内地であったと考えられるので、ほぼ、「山田岐れ」の線までが、土塀で囲まれた部分であったのかもしれない。

以上、「境内絵図」の世界を現地調査を踏まえて、分析してみた。

かつての浄住寺は、図のように地蔵院の地も境内に有し、谷田川にいたる広大な境内を有していたのである。(松尾 剛次)

第二章 「境内絵図」の地形の表現に注目した現地比定

京都市西京区山田浄住寺の境内絵図の現地比定を行うにあたって使用した史・資料は次のとおりである(以下、記号で引用する);

【史・資料一覧】

- A. 京都山田浄住寺の境内絵図(正慶2年、1332)(彩色図である) ——図1
- B. 浄住寺再建前絵図(伝元禄年間)(彩色) ——図3a、b
- C. 縮尺1:1,200地籍図 山城国葛野郡下山田村図面(明治17(1884)年3月より調査の地籍図)
- D. 大正11年測(同14年発行)縮尺1:25,000地形図(1922)
- E. 縮尺1:3,000都市計画図(大正11(1922)年測図、等高線間隔2m) ——図2
- F. 昭和21(1946)年米軍撮影空中写真(原縮尺1:10,000 国土変遷アーカイブ USA-R275-A-165より) ——図4
- G. 縮尺1:30,000都市計画図(京都市(編)、京都の歴史1-10付図、1976.10)「現代都

市＝京都の模索——生活圏の拡大と都市計画」(昭和6年ころの市街地および集落、嵐山柏原線の道路計画を記入したもの)

H. 縮尺1:2,500都市計画図(京都市役所、2008.9)

これらのうち、A、Bを参考にして寺域を推定し、Eを基図として、寺域と伽藍配置をまとめたものが図2である。寺域と伽藍配置についてはつめきれない点があり、図2には寺域の東限について2案を示したが、その西寄りの線は塀が台地の上縁を走る案であり、東寄りの線は塀の大部分が台地の裾を走る案である。

現在、台地の地域には新興住宅地が虫食い状に入り込んでいて地割が変化しつつあるが、大枠は条里制の土地割を継承している。条里制地割はEとFによく表されている(図2、3)。

この地域の地形を概観すると、西側の丘陵地(高度は最高125m程度、唐櫃(カヲト)越は尾根沿いの道で最高高度415m)、山麓の台地(高度60~40m、東西の奥行きは最大200m)、低地(高度30m以下)となっている。

丘陵麓と台地東縁が南北方向の一連の急斜面となっており、京都盆地の西側の断層に沿うものである。

台地の南北幅は約600m、台地の北は苔寺と呼ばれる「西芳寺」の谷(桂川支流西芳寺川)、台地の南は谷田川の谷である。台地の中央(山田開キ町)の山寄りに「(現)浄住寺」があり、台地北部(山田北ノ町)に竹の寺と呼ばれる「地藏院」が、台地の南東部に「西蓮寺」と「葉室御霊神社」がある。

台地中央の東寄りに古墳(山ノ上古墳)があり、古墳の周濠は地割としてEにも描かれて

いる。

低地の条里は、街道として東西約250m、南北約300mの区画がみえる(図2の○印地点)。それを細分する南北幅約100m強の区画に「四ノ坪」、「六ノ坪」の表記がみえる。条里区画は台地のほうにも延びているが、台地では矩形の形はゆがんでいる。

[境内絵図で表現されている特徴]

現地比定にあたって、地形や地割との対比において「境内絵図」の表現で特徴となる事項を述べれば次のようなる(図1)。名称注記のある施設には[]を付した。

- (1) 北・東・南に塀をめぐらしている。壁の北東角、南東角は直角に描かれている。
- (2) 西側は丘陵で、2つの谷によって分けられる。最も南側の山に「鎮守山」の注記がある。
北側は狭い谷で谷の中央にまっすぐな「大道」が描かれている。南側は狭い谷(谷田川の谷)でまっすぐな道が描かれている。北の谷と南の谷は、模式化されて、狭い谷底面と直線状の道が描かれ、谷幅・谷の向きなどは現況地形とはあわない。
- (3) 「標石」が置かれている。西側は3地点(北西隅、鎮守山の北の峠(もしくは谷口)、南西隅)にある。東塀にそって3地点(北東隅、東門、南寄り)に標石がある。
- (4) 東塀は、北東隅標石・東門・南東隅との間が3区間に区分され、南東隅―標石の区間は北側の2区間よりやや短い。3区分のなかに、さらに細分する線(柱)が描かれ、北東隅―東門、東門―標石の間はそれぞれ6区分、南東隅―標石の間は3.5区分ほどである。

(5) 北門、東門、南門がある。北門は坂の上
にあり、北側道路は谷に沿った道である。
寺域の北東隅の壁は明らかに斜面の下にあ
る。

東門は、7軒の頭塔とみられる建物の列
より高く、間に樹木(梅か桜)が描かれて
いるので、頭塔列とは距離がある。東門の高
さは、坂の上(すなわち台地面の縁)もしく
は低地の高さである。東門が台地の上縁に
あると、塀の北東角とは高さが違うことにな
るが、絵図では同じ高さ、もしくは、こ
ころもち北東隅が低く、たわんで描かれて
いる。

南門は塀の南東隅に近く、坂の上にある。

(6) 南部中央の[八幡神社]と[春日神社]は
矩形の紅い柵列で囲まれている。正面東側
の入り口(鳥居)は2つあり、湾曲した道路
から入る。裏の鎮守山までの間はしばらく
林地となっている。

(7) 中央の西寄りに[五重塔]、その南の傍に
[閼伽水]と注記された池がある。

(8) 中央の[四十九院]は段の上であり、一
段低く池がある。池の周囲に岩が配されて
いる。

(9) 中央の東寄りに[戒壇]があり、周囲に
岩(もしくは築山)が配されている。

(10) 上記の(6)と(7)・(8)・(9)との間に東西方向
の沢があり、(6)と(9)の間の道に紅い橋が描
かれている。

(11) 中央北側の真言堂は、矩形の塀で囲まれ
ている。正面東側の塀には8(または7.5間)、
西塀には6の区分線が描かれている。

(12) 北部中央の[食堂]と[浴室]の建物は、
北門に面する建物(名称注記なし)より一段
と高く、食堂との間に階段が描かれている。

(13) 西部の[舍利殿・宝蔵]と[宝塔・鐘楼]
との間に東西方向の道が描かれている。

(14) 東門と真言堂の入り口を結ぶ軸線は東西
よりわずかに北東-南西に振れ、道(不明瞭)
の両側に、対をなす標石と灯台?がある。
交差点が描かれている。

[境内絵図に描かれた地形と現況]

現況との対応は以下のとおりである。絵図
と現在の地形や地割との対比が出来た項目に
は◎印を付した。○印は対比できる可能性が
ある事項である。あわせて「浄住寺再建前絵
図(B、伝元禄年間、図3 a, b)」で表現さ
れている特徴についても述べる。

(1)について：北・東・南の塀に対応する痕
跡はいずれも失われて、土の高まりは認めら
れない。絵図Bにおいては、現浄住寺の境内
を取り囲むように、水路や石積みが描かれて
いる。その西限・北限・南西限には水路が、
東限には石積が、さらに東中央には2列の石
積によって3段の平坦面が張り出すように表
現されている。絵図Bに描かれた寺域は(現)
浄住寺の寺域とよく対応している。

◎東中央の2列の石積と3段の平坦面は、
現在の山門から本堂に至る現況と一致する
(図7)。

(2)について：西側の丘陵の描き方は粗くて
地形と絵図との対応がよくない。唐櫃越に至
る谷道は描かれていない。Bでは丘陵が谷に
よって2分され、その間に山道が描かれてお
り、「山塙より堀マテ東西三十六間」、「桜谷山
道」の付箋がある。付箋が付けられた時期は
わからない。

(3)について：標石は絵図Aによれば塀の高
さ(2層楼門の下層の高さ相当)に描かれてい

て、大きなものであったと考えられるが、現況では認められない。絵図Bでは、縮小された寺域の4辺の表現は明瞭であり、北辺の標石に「大界南北標石」の注記がある。西辺は山麓に溝が描かれており(境内絵図Aにはない)、寺域の西限を踏襲するものであろう。

(4)について：◎東塀の3大区分と、その6細区分は条里に対応する。北側2区画の6細区分は坪の南北幅の3坪分に対応している。

(5)について：◎北門の位置については、台地の北側は急斜面で、西芳寺の谷から地藏院に登る道(現況は階段、街道でもある)が唯一であることから、その坂上であろう。

◎東門の位置は、低地の条里地割との対応から、現況唐櫃越えに至る坂道に沿って、坂上もしくは坂下であろう。東門の位置は、絵図Aでは7軒の頭塔とみられる建物の列より距離があり、両者の間に樹木(梅か桜?)が描かれているので、頭塔列とは距離がある(かつ斜面か?)。東塀の位置が台地の裾であるとするとき、その北部については地形図Eにある土地境界線(おそらく継承されてきた地割線)にそって引くのがよいであろう。

◎南門の位置は、塀の南東隅に近く、坂上で、神社区画(八幡神社と春日神社)の南縁であることから、西蓮寺の南の坂と考えられる。

寺域の南東隅の塀が直角であるためには、東側の低い段を含める考えも成り立ち、八幡・春日神社の参道が斜めとなっているのが斜面であることを表しているとするならば、さらに合理的である。ただし、境内絵図A(図1)では塀の南東隅に近い南側斜面は、南門の下とほぼ等しい比高の斜面が描かれている。

(6)について：◎八幡神社と春日神社は現在、浄住寺の本堂南側に小さな社が祭られている。

絵図にある両神社の区画の大きさを考慮すると、現在の西蓮寺と葉室御霊神社を合わせた部分に比定される。絵図では両神社の入り口(鳥居)に斜めの道で入るように描かれており、これらが坂道を表しているのであれば現地形とも合致する。

(7)について：◎五重塔と閻伽水は、西側の丘陵に近い位置に描かれており、(現)浄住寺の本堂と池に比定されよう。

◎B図では、池の北側に土壇の中に18個の石が描かれ5×5の礎石をもつ建物が想定される。現在の庫裏の位置である。池の南には「石十四」の付箋のつけられた12個の石が描かれていて、4×4の礎石をもつ建物が想定される。現在の本堂の位置にあたる。

(8)について：○四十九院は段の上であり、一段低く池が描かれているが、四十九院は(現)山門の一段上の平坦地に、池は(現)浄住寺の山門付近に比定されよう(谷筋に沿ってやや低く、岩もある)。図Bの「石ノカズ四十基」と付箋がつけられた礎石群の位置にあたる。建物跡を切って、その中央に東西の道が、これより下方に段々の土地が描かれているが、池の表現はすでない。

(8)について：○戒壇は(現)山門より下(東)で「山ノ上古墳」かその1段上の平坦面(現駐車場)付近であろう。配石に囲まれ、土壇をもつ構造であることから、「山ノ上古墳」を利用しての可能性もあろう。

なお、八幡神社と春日神社の前の道(次に述べる(10)の北の延長上(直線とはならない)にあるとすると戒壇の位置は浄住寺山門の前の凹地にあったと考えることもできる。そのとき池の位置は一段上になる。

(9)について：◎(6)と(9)の間の道に「紅い橋」

が描かれているが、現況の沢の深さを考慮すると、(現)西蓮寺と(現)浄住寺山門とを結ぶ道で両者の中間付近が考えやすい。これより下流では沢が深いために、橋は長く・高くなるか、沢に下りなければならない。

(11)について：○真言堂を囲む区画は大きな矩形の地割であり、かつ東門の軸線からわずかに南に偏る(北東－南西に振れる)点で、(現)山田北ノ町・山田上ノ山町・山田葉室町・山田開キ町の境の十字路を北東角とする山田開キ町の区画が予想される。Eには東西道に沿って道の両側にケバが描かれているので、道の部分が高く、もともと塀であった可能性がある。B図には、推定四十九院の北側に(低い土塁?に囲まれた)矩形の地割が描かれているが、建物基盤としては大きすぎ(東西二十間の付箋)、真言堂を囲む区画としては小さい。その北側に2本の水路2と小径が描かれており、小径は西の丘陵の谷にむかっているから、唐櫃越えに向う道を表しているであろう。この道は、真言堂の中軸線を引き継いでいる可能性がある。

(12)について：◎北部中央の食堂の建物は、東西方向に一段と高いところにあるように描かれているが、(現)地藏院付近の東西の稜線に対応しているようにみえる。

(13)について：◎西部の〔舍利殿・宝蔵〕と〔宝塔・鐘楼〕との間に東西方向の道が描かれているのは、(現)地藏院の山門から本堂にいたる参道の位置にあたるのであろう。

(14)について：東門と真言堂の入り口を結ぶ道の両側に、対の標石と対の灯台が描かれており、台地を刻む谷道(図6)の両側に標石と灯台とが映えてみえる配置であるが現況ではみあたらない。

以上を地形図Eに記入したものが図2である。(伝)元禄年間の再建前絵図Bには、現浄住寺の寺内に礎石を持つ建物跡が記載されており、五重の塔、池(閼伽水)、四十九院の位置をほぼ特定できるが、境内絵図Aには描かれていない建物跡(現本堂の位置)も見える。

(阿子島 功)

おわりに

正慶2年の境内絵図の世界を、現地比定してみた。浄住寺は平安京の西に東西1～2町余、南北5町の寺域を有する巨大寺院であったことがわかり、中世平安京における叡尊教団の繁栄ぶりが窺える。

注

- 1) 葉室浄住寺の歴史的な位置づけと「境内絵図」については、拙稿(松尾、2007、2008)などを参照。ただし、松尾2007では、「浄住寺境内絵図」の作成月を十二月と間違った。二月と訂正する。
- 2) 『史料京都の歴史第15西京区』(平凡社、1994) p.135

文献

- 松尾 剛次(2007) 「葉室浄住寺考」。山形大学歴史・地理・人類学論集, 8, pp. 1-12
- 松尾 剛次(2008) 「叡尊教団と中世都市平安京」。戒律文化, 6, pp. 1-29

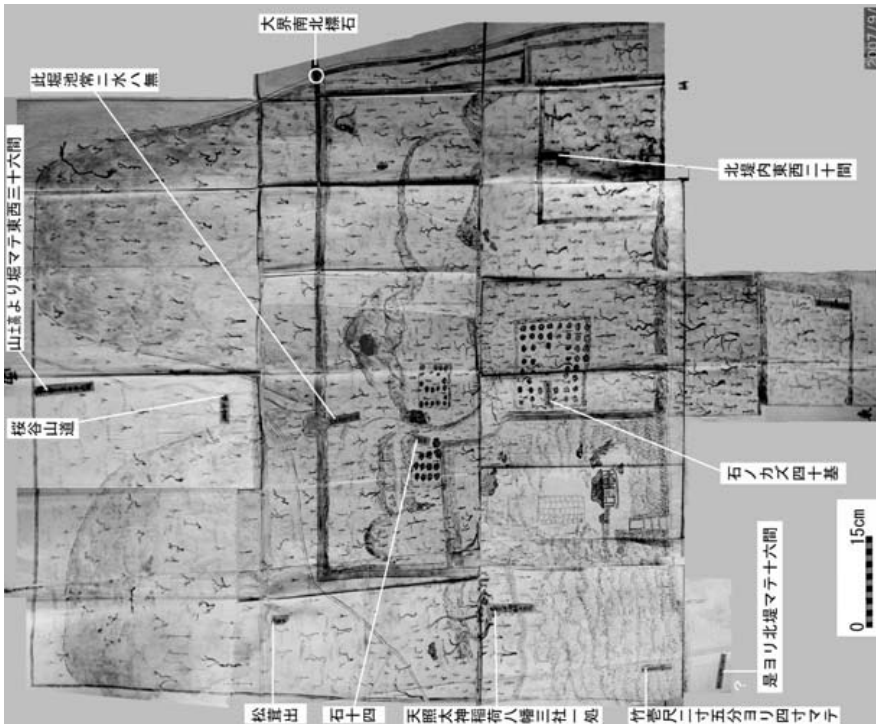


図3 a 浄住寺再建前絵図(伝 元禄年間、浄住寺蔵)

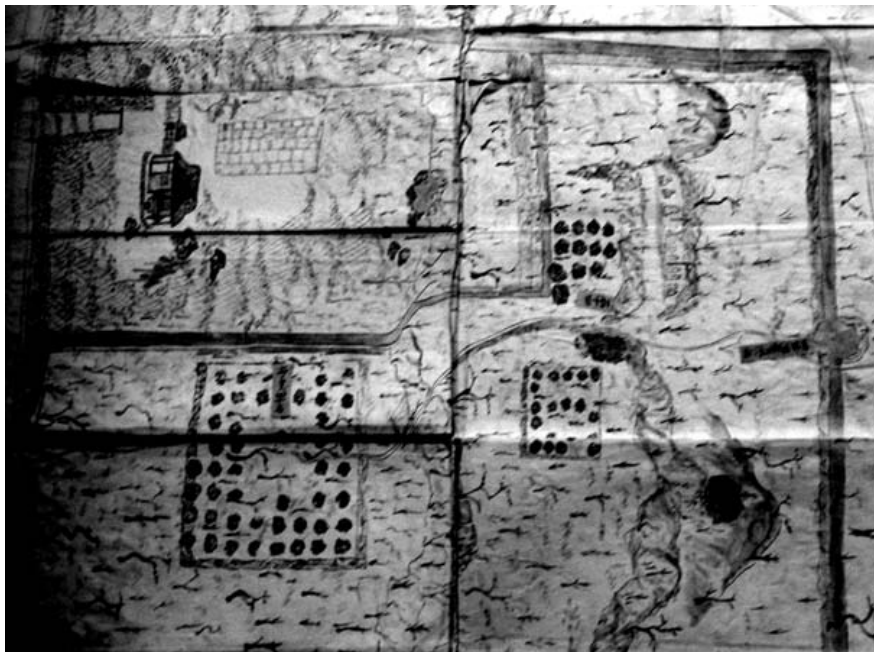


図3 b 浄住寺再建前絵図(伝 元禄年間)の部分拡大 →東



図4 昭和21年(1946年)空中写真
米軍撮影(国土地理院 原縮尺
1:10,000 USA-R275-A-165より)

→北



図5 寺域の(推定)北東隅付近。低地より台地を仰ぐ。

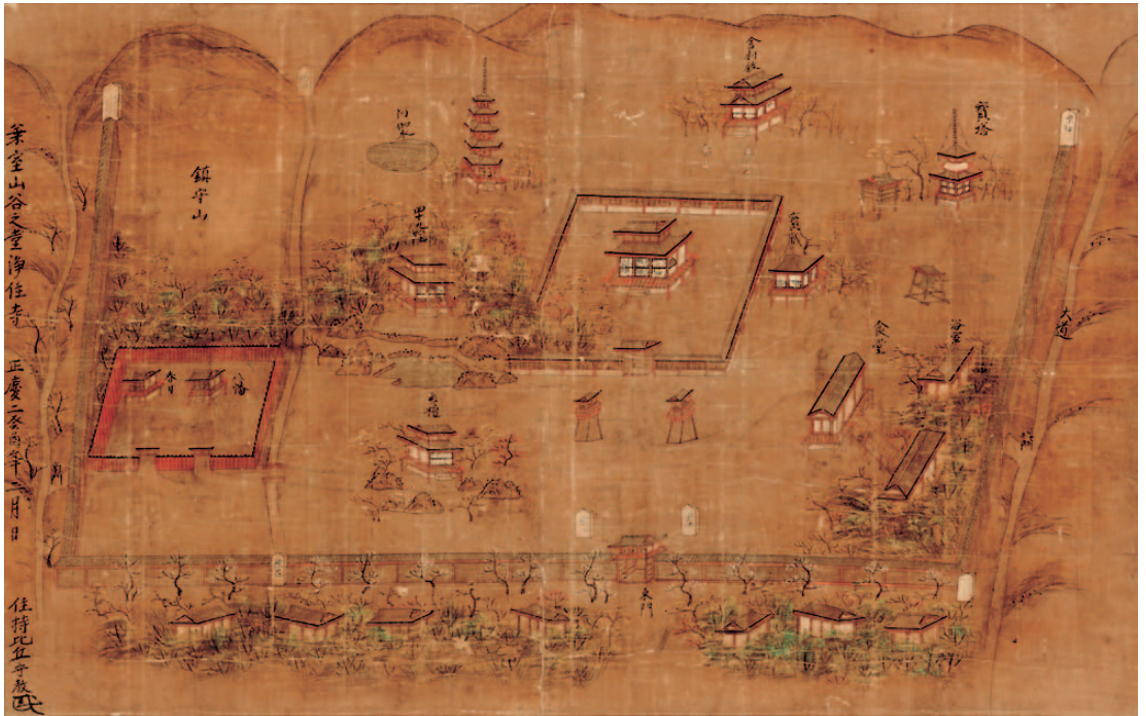


図6 (想定)東門に通じる道
(上) 台地の縁の切り込み
(下) 台地下より坂道を仰ぐ



図7 現浄住寺山門付近。
奥に(推定)四十九院の段地がみえる。

山門より手前に池の位置を想定。向
かって左手に沢筋がある。



京都洛西山田淨住寺境内絵図